

読者との心の交流—理性と感性—

榎場 雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

- 親子から 親と子になる時がきて との一字の ふくらみやまず
- 子育てと介護の分母 終わりたり われも分子となる日 来るらむ

先月号に続いて、この二首を冒頭の言葉とさせていただきます。それというのも、この二首が投じた波紋は大きく広がり、多くの皆様がわが身に重ね、深い思いを相談室に寄せて下さいました。百万言を費やすより、実話をそのまま紹介して感動を分かち合いたいと思います。

- 志望校めぐりて争う母子戦 親と子となる 兆しなるらむ

LさんはM家のひとり息子で、成績優秀、スポーツマンで友人も多く、順調に育っていました。ところが高校受験をめぐっての三者面談で、担任教師から、第1志望校の変更を勧められました。怒ったLさんは、「A高校が駄目というなら、受験などはしないよ。高校にもいかないよ」とまで言いだしました。母親（相談者）はおたおたして「高校にも行かないでどうするの！」と言って、母と子の冷たい戦争となりました。救いの手を伸べたのは父親でした。「新しいふれあい社会」を示して、「親子から親と子になる時、なかなか面白いね。ここへ相談するといいよ」と当相談室に相談するように勧めました。母親からの相談を受け、「高校受験は、今まで親や先生の言うことを素直に聞いていたよい子が、初めて自己主張します。つまり、親子とセットで考えていた関係から、親と子になる時と考えられています」と伝えました。母親は釈然として、その日のうちにLさんと話し合い「第1志望はLの主張に従い、すべり止めは母親の意見を入れ決定した」と報告に併せ、前記の歌を示してくれたのでした。Lさんは、今は受験勉強に一生懸命とのことです。

- 認知症の 父は夢見る人のよう きのうのことはすべて忘れて

- もう朝だ 昨日のことは忘れよう 顔の代わりに心を洗う

Nさんは66歳。95歳の認知症の父親を介護しています。親子ふたりは毎朝30分から1時間、辺りを散歩しています。物忘れのひどい父親は、昨日のことはすっかり忘れて、何を見ても珍しく、近所の人に出会っても「お初に」と挨拶します。私（相談者）が同じ話を何回しても、「ほーっ、なるほどねえ」と感心したように真顔で聞いてくれるので、私の方が助かっています。ちなみに私が父親と自分のことを詠じた短歌二首（冒頭の）を父親に見せたところ、自分のことを、息子の私が歌ったなどとは露思わず、「ほー、これが現代短歌かね。内容のあるものだがねえ」と応じてくれました。

「すみません。いま特に困ったことはないのですが、「新しいふれあい社会」を読んで、無性に話がしたくなって、電話をしてしまいました。貴重な時間を申し訳ありませんでした。聴いて頂き、ありがとうございます」と恐縮していました。受け手としては、何故か心あたたまるものを覚え、ここ「こころの相談室」は「心のお休み処」でもあるのです、と答えました。

ここでもう1件。1日に2回、あわせて1時間30分余にもおよぶ、現代の社会問題の象徴とも言える、考えさせることの大きな相談でした。

○連れ帰る ことはかなわぬ母の手を 拭きつつおのずと 涙こぼるる

○惚けるも 涙を流す我をみる 母のその目は 親の目なるも

73歳のOさんは、1年3か月前までは夫とふたりで恙なく生活していましたが、夫が脳出血で急逝してから、急に認知症様症状が出現して、火の始末も覚束なくなり、ボヤ騒ぎまで起こして、P市に住む娘のQさん宅に引き取られました。ところが、Qさん宅はマンションの6階で、田舎の一戸建ての広い家に住みなれていたOさんは馴染むことができず、トイレの場所も覚えられず、しばしば失禁するようになり、認知症が更に進んでしまいました。

一方Qさんの家族は夫婦に小学生2人の核家族で、平穏な生活が続いていました。そこへ突然の認知症高齢者の出現（同居）には戸惑いを隠すことができず、特にふたりの子どもは、夏休みには「お母さんの田舎」ということで遊びに行き、優しくしてもらったおばあちゃんの印象との落差の大きさに納得できず、遂には拒否反応さえ見せるようになりました。

Qさんは夫にも相談して、ケアマネージャーの支援も受けOさんをケアホームに入所させました。しかし、Qさんにとっては寂しさを否めず、「母親の最後は家庭で看取りたい」という思いが強く、毎週のようにホームに足を運んで、「お母さん」と呼びかけては、細々とした世話をしています。「もともと穏やかで、言葉数も少なかった母は、ますます言葉少なになって、ホームに入れられた恨みも、職員の対応についての不平も不満も言わない姿に、いとおしきは更なるものとなります。帰り際に母の手を拭きながら『また来るね』と言っても、頷くだけの母の姿に涙がこぼれました。そんな私を覗きこむように見た母の目は、惚けた人のものではなく、紛れもなく母親の目でした」と言って、示してくれたのが先の二首でした。

話は更に続きます。「母の見舞いに心惹かれて、つつい手間取り暗くなってから帰宅すると、娘ふたりは、『おばあちゃん元気だった?』と聞き、夕食のお米まで洗ってくれているのを見ると、今さらに“私が母親である”ことの重さに気付かされ、申し訳なさを突きつけられた思いがします。「新しいふれあい社会」に載っていた『子育てと介護の分母の時代』の双方をまともに背負っています」と、涙ながらの長い訴えでした。

しかし、自宅にいながら誰にもはばかりことなく話している自分がいて、それを真っ直ぐに聴いている人がいる電話相談で、鬱積していた気持ちが晴れたのでしょうか、最後はごく自然な口調で、「認知症の母親の介護と子育て真っ最中の両ばさみの辛さなどではない、血を分けた二世代の親子の物語ですね」と、悟りをひらいたような言葉が返ってきました。

問題解決のためには、それを理解する理性もさることながら、それを感じ取る感性の大切さを、寄せられた数々の相談が物語り、強く教えられた思いがしています。

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日 毎週木曜日 午前9時～午後9時

相談担当 榎場主任相談員 電話番号 04-7100-8369 個人情報厳正に取り扱います。

〈市民のまなざし〉★「新しいふれあい社会」の発行から1年9カ月が過ぎました。「こころの電話相談室」の開設から9カ月、この間に寄せられた相談・感想は92件を数えます。★筆者と読者、相談員と相談者との間には、新しいふれあい社会に相応しい心の交流が芽生えているのです。こんな光景をいったい誰が予想したのでしょうか。★私たちが究極の目標として掲げる「市民が市民を支える社会」に向かって、ほんの少し前進できたことを実感します（h）。